

日本NIE学会会報

第26号

[発行所] 日本NIE学会事務局 〒739-8524 東広島市鏡山1-1-1 広島大学大学院教育学研究科 朝倉淳研究室内
TEL/FAX 082-424-7130 E-mail: aasakura@hiroshima-u.ac.jp

日本NIE学会第10回愛知大会、デジタル時代のNIE

2013年11月23日(土) 24日(日) 両日、愛知県名古屋市において日本NIE学会第10回愛知大会が開催されました。全国各地から300名を越す方々にお越しいただき、報道関係者や運営スタッフをあわせるるとほぼ400名となる大会となりました。

今回の大会では、ネット社会の中で若い世代の新聞離れが加速する一方で、情報を適切に選択したり、より正確な情報を発信できる人を育てることが求められるいま、NIEの役割を問い直すことを課題としました。そのため、1日目のシンポジウムは、「真価問われるデジタル時代のNIE－価値ある情報を教育に－」というテーマを設定しました。シンポジストには、大谷昭宏氏(ジャーナリスト)、羽田潤氏(教育学者)、春香クリスティーン氏(タレント)各氏を招き、NIE実践家である市川正孝氏とあわせて4名のそれぞれの視点から対話を試みました。このシンポジウムを受けて、参加者が20～30名のグループに分かれて、NIEを語る「ラウンドテーブルセッション」を実施しました。さらに、2日目の自由研究発表では、4分科会26の発表があり、NIE研究がさらに深まりました。

今回の大会は、学術の社会貢献という視点から、学会員以外の実践者や報道関係者に対して可能な限り公開しました。シンポジウムは、1月末までの期間限定で大会ホームページから動画配信しました。また、2日目には、NIE初心者向けのワークショップを企画し、大学生を中心に学会員以外の人々も多く参加しました。このような方針は、学会の大会として、議論の余地があるとはいえ、知る権利の大切さと情報公開の役割を担う新聞と教育との関わりを研究対象とする本学会の姿勢として、報道機関や地域の教育界・企業・団体に説明しました。シンポジストの各氏もこの趣旨に賛同して参画いただきました。

本学会の特色として、NIE推進協議会ははじめ地域の協力があります。今回、地元中日新聞や朝日・読売各社のワークショップがありましたが、会場校の名古屋学院名古屋中学校新聞部員と愛知教育大学国語科の学生が大会の様子を取材し、それを新聞として大会2日目の朝に号外として会場で配布しました。これは、中日新聞社の「ドラゴン号」という号外発行機能を持つマイクロバスによる印刷と同社NIE事務局の編集協力があったことでした。このほか、シンポジウムの動画記録とネット配信は、名古屋ビジュアルアーツ専門学校の学生が実習の一環として、大会実行委員会と協働で行ないました。このように「情報」や「教育」も地域に根ざしてこそ発展するものだと思います。今回の大会は、中部地域のNIE実践の新しいスタートラインとなると思います。これから、継続していくことが大きな課題です。

学会員の皆さまはじめお力添えいただいた各位に、心より感謝申し上げます。

(日本NIE学会第10回愛知大会実行委員会 土屋 武志)

◎メディア多様化時代、新聞の役割を考えたシンポジウム

シンポジウムは、次の3点を課題として行われました。

- ・震災・原発・いじめ・体罰など社会的課題に立ち向かい未来を拓く人間を育成するため、新聞はどのような役割を果たすか。
- ・紙かネットかでゆれる新聞はどのように変化するか。それを学校でどう活用するか。
- ・以上の課題にNIE学会はどのように関わっていくか。特に若い実践者をどう育てるか。

シンポジウムは、小原友行氏により次のように総括されました。

大谷氏の問題提起から、議論ができる社会が大切であり、新聞はそれを生み出す。そのためには深い内容の記事が必要なのではないか。たとえば、特定秘密保護法案が出されて気づくのではなく、その前にそれを考える記事が必要なのではないかという新聞の本質的な役割が示されました。春香クリスティーン氏からは、若い世代が希望と好奇心を持てるようなニュースに出会うことが大切だということ。羽田潤氏からは、情報は新聞だけでなく様々なメディアによって伝えられているいま、マルチメディアの中でのNIEを追究していく必要がある。そして市川正孝氏からは、新聞は粉ミルクのような教材であり、それを溶いていく溶き方によって身になる教材となる。そのための協同的な学びが大切だということ。そのような今回の議論へのコメントを踏まえ、小原氏は、日本で、インターネットやテレビを見過ぎることを注意する保護者はいても、子どもが新聞を読みすぎることを注意する保護者はいない。NIEで育った子どもたちは着実に増えている。新聞が伝えようとしているメッセージは伝わっているし、NIEは子どもを育てる力がある。学会なので結論を一つにしぼる必要はなく、むしろいろんな議論が生まれていくことが大事であり、そのような議論を生み出す市民性をNIEは育てていると総括されました。

(土屋 武志)

◎認識を深めたラウンドテーブル

今回の学会の特徴の一つは、シンポジウムの後に、ラウンドテーブルを設けたことです。(参加者の多くの方に発言の機会を保障し、議論の中身を深められるようにしました。)各ラウンドの運営担当者による準備会でテーマも入念に練り上げられていましたので、初心者にも経験豊富な実践者にも有益な時間になりました。昨年の学会内容を引き継ぐために入れた「震災報道と教育」のラウンドでは、小・中・高校の教員、報道(テレビ、新聞)出身の大学教員、震災を取材した現役新聞記者、大学生など多彩な参加者の間で具体的な議論が展開されました。震災を風化させないために、学習計画を修正して指導にあたりたり、切り抜き活動を進めたりするなどの意欲的な実践紹介がありました。また、英語教育の中で震災を取り上げた事例報告もありました。現役の記者からは読者により伝わるような震災報道の工夫も紹介され、(まさに)開かれた学会になりました。

(実行副委員長 市川 正孝)

◎自由研究発表

■第1分科会

1 樋口克次（名桜大学）

「表現素材としての新聞 —12年度の講義「新聞を読む」の実践を通して—」

学生の過半数が新聞購読していない。小中学校でのNIE実践に連続性がない実態から、新聞を読むようにして社会へ出すことを目的に、「プレゼン実践の充実」を目指した実践が報告された。今後の課題として、話し手・聞き手両者への評価の工夫が挙げられた。

2 村山正子（相模原市立鶴野森中学校）、三上久代（札幌市立平岡中央中学校）

「新聞社説15紙比較 —中学3年国語科の授業実践—」

距離の離れた2人の実践者からの報告。国語科「意見文の書き方」、司書教諭「多様な情報資料を提供」、NIE「新聞をまるごと使う」という3つの立場の実践。社説の学習は、高校にも繋がる、扱う際はテーマか日付かどちらで比較するか留意が必要などの意見があった。

3 伊吹侑希子（京都学園中学高等学校）

「学校図書館を活用したNIE —小論文指導の実践報告—」

社説は文体上、常体で書く模範となること、時事の知識が増やせること、AO入試は新聞からの出題が多いことに着目し、図書館やワークシートを活用した実践が報告された。ラーニングコモンズとしての学校図書館の使い方も考えて行くべきという指摘もなされた。

4 岡本光子（伊丹市立笹原中学校）

「『朝NIE』で育む力と社会を見る目」

生徒指導困難校にあって、校長自らが朝読書の時間に朝NIEの導入を提言し、「先生方が楽しまないと続かない」と率先して職員と共になされた熱い実践。ワーク指導によって書くことへの抵抗が減ると共に、短時間で集中して読む力がついていると報告された。

5 今井慶宗（奈良保育学院）、松井圭三（中国短期大学）

「大学の社会福祉教育に関する一考察① —保育学科を中心に—」

アンケートをもとに、大学教育として社会福祉教育の中でより良い新聞活用の実践を展開しようとした実践。記事をもとに自己の意見を展開できる訓練が、高等学校までに身に付いていない傾向があるという指摘もあった。

6 田沼正一（伊勢崎市立豊受小学校）

「学びを広げ、深める新聞活用授業の充実 —教職3年目以下の若手教員研修を通じて（2年次）—」

実践者が自ら算数科で新聞を使った授業を実践して、若手教員に示したり、「教師力アップ研修」の中で積極的にNIEを提唱したりする等、組織内での活用手法を紹介する。新聞を読んでいるか否かを、就職関係の採用基準にすべきという意見も聞かれた。

7 稲井達也（日本女子体育大学）

「中高国語科におけるNIEの評価規準の試み」

中高国語科において、これまでにまだ研究があまりなされていない評価規準について提案。NIE独自の評価と考えてもよいのではという意見もあった。また、規準を作ることが、新聞活用の意義を明確にしていくことにつながるという指摘は多く聞かれた。

（司会 阪根健二・三原貫司）

■第2分科会

1 豊田久晴（愛知県あま市立七宝北中学校）

「言語活動を取り入れた新聞活用学習 — NIE 活動を通して人を見つめて心を見つめて—」

長年にわたるNIE実践の経験をふまえて、道徳教育において、自己を見つめ・人を思いやる心を育てるためには、心にうったえかける新聞記事を題材にして、自己の内で「読み」「考える」とともに、さらに他者と「伝え合う」という言語活動を取り入れることが効果的であることについて報告された。

2 柴田康弘（福岡県飯塚市立穂波西中学校）

「社会形成力育成を目指すNIE学習(2) —社会科における「いっしょに読もう！新聞コンクール」の分析と取り組み—」

日本新聞協会主催の新聞コンクール入賞作品と所属校1年生の作品およびアンケートを分析した結果、他者との議論により社会形成力が育成され、(市民)社会科の目標に適う一定の成果が認められたという報告であった。市民的資質育成の評価判断に質問があった。

3 越地真一郎（熊本日日新聞社・熊本大学・熊本学園大学）

「新聞で『知の素っぴん力』を磨こう —テーマ別、対象者別の紙面展開—」

「知の素っぴん力」とは「学校や社会のいろんな場面で応用がきく地力」である。その基本は「言葉の力」にあることから、新聞を題材に学びあおうという「しんぶんカフェ」の試みについて、熊本大学で毎週主催している実践などをもとに報告がされた。大学でのNIE、さらに地域でのNIEの展開として興味深い報告であった。

4 中田正浩（前環太平洋大学）

「小学校社会科におけるNIEのすそ野を広げるために —教員免許更新講習を通して—」

NIE実践者のすそ野を広げるために、教員免許更新講習で、小学校社会科の授業改善に生きるNIEの魅力や取組のポイントを理論的実践的に提案した報告であった。また、岡山県ではNIE大学部会が組織され、実践交流が行われていることが報告された。

5 熊本 喬（大阪府羽曳野市立恵我之荘小学校）・森田英嗣（大阪教育大学）

「新聞記事を介してコミュニケーションを活性化させる教育方法に関する研究」

新聞記事を題材に友人や家族と話し合う活動を活性化させ、広がりや深まりをもたせるためには、どのような条件が必要なのか。これをマインドマップの手法をもちいた統計的な分析により示そうというもので、とくにNIEに関する実証的な研究として注目される報告であった。

6 勝田吉彰（関西福祉大学）

「大学FD活動におけるNIE展開 —大学NIE普及に向けた一試行—」

大学教員のNIE拡大を目的にFD (Faculty Development) 研修にNIEを取り入れた実践が報告された。内容は、外部講師講演やNIE実践報告、新聞活用ノウハウなどで、FDにNIEを組み込むことが大学でのNIE普及に効果的であるという点が興味深い。

7 鍛冶直紀（大阪府立和泉高等学校）

「夜間定時制高校における新聞利用の可能性 —『現代社会』の授業実践から—」

報告者がかつて勤務していた夜間定時制高校において実践した、新聞記事をもちいて時事的なテーマにより単元を再構成した「現代社会」の授業によって、さまざまな背景をもち、自己肯定感や学習意欲などに課題をもつ生徒たちに、ニュースや社会への関心そして社会への参加意識をもたせることに効果があったことが報告された。

(司会 平石隆敏・白井淑子)

■ 第3分科会

1 小橋一久（河合塾）

「NIEを活用した市民性教育の展開」

若年層の政治離れで国政選挙などの投票率が低迷し、民主主義の機能不全が指摘されているなか、参政権、選挙権についてNIE学習の観点から学習計画を提示するものだ。市民として、現状を理解し、課題を発見し、解決方法を考えるための新聞活用を柱に据えており、それにより新聞への興味が促される、と指摘。選挙を主題とする際に「投票行動」をどう織り込むかなど、より実践的な試みについて質問があった。

2 松井克行（西九州大学）

「社会科教育における共感力を高める NIE 教材 —『路上で消臭 生きるため』を用いた授業実践の分析を通して—」

失業、派遣切りなど社会問題を学ぶ上で、共感力を高める記事教材の可能性を提起した。高3の政治経済の単元「貧困・格差を考え、感じ、気づく授業」でテキストに連載記事「歯止めなき雇用不安」、リーマンショックによる大量失業を検証した記事を授業で使用した実践で、労働の描写や人間ドラマによって、自己責任論の再考へと変化が見られたことを報告。同情的要素や沈着冷静な判断の変容にも論が及んだ。

3 田野辺浩一（鹿児島県霧島市立日当山小学校）

「郷土を愛する態度を養う新聞活用学習 —小学校第3学年における社会科・総合的な学習の時間の授業実践を通して—」

地元の霧島市への印象を問うアンケートをもとに、「誇りと愛情を持ち、地域社会の一員として積極的に関わっていこうとする態度の育成」をめざすNIE実践が報告された。新聞地域面の記事を資料に、調べた内容を新聞形式でまとめる学習を紹介。テキストとしての記事の有効性を検証する内容で、学習後に新聞への児童の興味、関心が明確に増しているデータが注目される。

4 真島聖子（愛知教育大学）、小塚良孝（愛知教育大学）

「New York Times を活用した大学院社会科授業実践」

留学生を含む大学院生が対象の試みとして、「社会科教師をめざす学生をどう育成するか」という問題意識をベースに、メディアリテラシーを身につけ、メディア受容能力や社会参画への意識を高める実践が紹介された。時事英語のリーディング資料というハードルの高い教材は読解で消化不良の面もあったようだが、海外の社会問題などグローバルな視点を養うメリットなどが報告された。

5 金子幹夫（神奈川県立平塚農業高等学校）

「NIE とキャリア教育—『人はどうして働くのか?』を新聞記事から考える」

社会の最前線で生き生きと働く人々の写真が載った記事79本(2013年2～3月)をリストアップし、高校2年の公民で使用した実践を報告。日常的に触れる機会があり、勤労観や職業観の形成に大きな影響を与え得る学習材として、キャリア教育に生かそうという狙いだ。この学習を通し、生活のため、収入を得るため、という限られた動機が生きがいなど広範な回答に広がったという。

6 山西敏博（小山工業高等専門学校）

「NIE を通じての【労働】の尊さ・大切さ」

新聞の求人広告、労働状況データや英文解説を活用し、ももいろクローバーZの「労働讃歌」や岡林信康の「山谷ブルース」の鑑賞などを織り交ぜたユニークな高専での授業実践が紹介された。労働とは何か、働くことの尊さ、大切さをどう理解しているのか、心理分析を踏まえた考察につい

て英語や歌の実演を交えて報告した。実社会を意識した内容は、先に行われた発表を受ける形ともなった。

(司会：城島 徹・鈴木健二)

■第4分科会

1 空 健太 (岐阜工業高等専門学校)

「技術者倫理教育における新聞を用いた意義と課題」

オムニバス形式の工学部授業の参与観察というケーススタディを通して、技術者倫理教育におけるNIE実践の現状と課題について報告された。分析対象となった実践では新聞が社会（世界）と学生とを繋ぐメディアとして位置づけられ、授業毎の各主題の事例として扱われていた。課題としては、学生は新聞が技術者に求めている価値観等も読み解いていくことが残されていると報告された。

2 江島徹郎 (愛知教育大学)・野崎浩成 (愛知教育大学)・梅田恭子 (愛知教育大学)

「インターネットを活用した大学生の選挙に関する実践」

2012年11月の衆議院選挙と2013年7月の参議院選挙それぞれについて、勤務校の学生を対象にしたインターネット模擬投票結果についての分析を報告された。被調査者達は候補者についての情報をインターネットのみならずテレビからも多く得ていること、実際の選挙結果とほぼ類似する投票傾向にある事等が指摘された。質疑では、本研究がNIEに対して示唆することは何か、バンドワゴン効果（世論の主たる傾向に従う傾向）が生じた要因についての見解を問われた。

3 植田恭子 (大阪府大阪市立昭和中学校)

「『対話』『交流』を通して主体的に情報と向きあう―帯単元『防災・減災について考える』―」

阪神・淡路大震災以後、報告者がとり組んできた防災・減災学習を更に発展させ、東日本大震災を題材にしたICTを組み入れた帯単元の実践について報告された。新聞記事・社説（デジタル新聞記事の検索も）やDVD（釜石の奇跡に関する）、記者（ゲストティーチャー）、そして被災地とのSkypeによる交流といった多様な活動を通して、被災者への想像力や情報について知的に吟味する力を育むねらいで取り組まれた。質疑では福島を取り扱わない意図や来年度以降の実践計画等について出された。

4 二田貴広 (奈良女子大学附属中等教育学校)

「デジタル時代のNIE―朝日新聞デジタル for school を活用して―」

①Skypeでの記者との交流が直接対面での交流と同じ効果をもたらす学習方法の開発、②デジタル新聞固有のコンテンツを取り入れた、新たな学習方法の開発というICTを活用した2つの実践研究とその検証結果とが報告された。①では海外駐在記者の記名記事を朝日新聞 for school（以下、「朝日」と略記）から検索し、どのような社会的な事象を取材しどのような記事を書いてきたかを把握させ、その上でSkypeによる意見交流を行った。本実践結果は2010年、2011年度に行った記者との直接対面型の実践結果と比較され、教育効果において同様の結果が得られた。②では「朝日」の「写真地球儀」を用いてクラスごとに提示する資料を写真資料のみ、記事のみ、新聞掲載写真とした。その結果、記事のみのクラスでは論理的分析能力が、写真のみでは世界を直感的に把握する能力が主に育まれたと報告された。質疑では、実践の補足説明、「朝日」が意図することをどのように読み解くか等について出された。

5 柿沼佑樹（長野県飯山市市立秋津小学校）

「故郷・飯山に愛着をもち、魅力を県内外に発信する新聞活用のあり方」

平成27年度開業予定の北陸新幹線・飯山駅を巡って飯山の観光資源の発掘や再確認を子ども達と行った「飯山観光情報新聞づくり」を中心に報告された。本実践の大きな特色は教室の外の声を積極的に取り込んで、新聞づくりを丹念に長期間行っている点にある。長野駅前や市観光商工課関連のシンポジウムでの新聞配布のアンケート結果を踏まえ、保護者の意見も取り入れ、飯山だけではなくいわば東京の目線からも紙面づくりしていったのである。その間、信濃毎日新聞社等のいわば新聞づくりのプロからのアドバイスも受けている。作り上げた新聞は東京・修学旅行で有楽町駅にて400部配布された。また本実践は長野県こども新聞コンクール等への出品、県庁での子ども記者体験、国語等の教科でのNIE実践等の多様な学習活動を取り入れており、裾野の広い実践であることも大きな特色である。質疑では、子どもの学びがどのように進展したか・変容したかについて詳しい分析が欲しい等が出された。

（司会 重松克也・伊藤達也）

日本NIE学会 第10回総会報告

以下のとおり第10回総会が開催され、原案のとおり了承されました。ここにご報告申し上げます。

- 日 時 2013年11月23日(土) 17:10～
 会 場 名古屋学院 名古屋中学校・高等学校
 議 事 1 平成24年度決算報告および会計監査報告
 2 平成25年度事業計画および予算
 3 第11回学会開催地
 4 役員改選

平成24年度 決 算 報 告

日本NIE学会 平成24年度収支報告（決算案）（平成24年4月1日～平成25年3月31日）

（収入の部）

項 目	予算 (円)	決算 (円)	適 用 (円)
平成23年度繰越金	1,884,053	1,884,053	
会員会費	1,500,000	1,557,000	一般会員分 305名 (21-25年度分) 学生会員分 16名 (24-25年度分)
法人会費	900,000	950,000	19社×@50,000 (24年度分)
雑収入	10,000	30,000	学会誌売上
合計	4,294,053	4,421,053	

(支出の部)

項 目	予算 (円)	決算 (円)	適 用 (円)
会議費	800,000	577,720	第16回常任理事会 (9月) お茶代 1,800 第16回常任理事会 (9月) 交通費補助 278,000 第17回常任理事会 (3月) 交通費補助 257,000 第17回常任理事会 (3月) 会場費 10,920 第9回理事会 (11月) 昼食費 30,000
会報	80,000	79,380	第21号 会報 (6月) 印刷代 11,760 第22号 会報 (10月) 印刷代 23,520 第23号 会報 (2月) 印刷代 44,100
学会誌	800,000	666,000	第7号印刷代 666,000
連絡・通信費	300,000	153,880	宅配便ほか運賃料金 145,440 郵送料 8,440
第9回大会運営補助費	200,000	150,000	第9回大会補助 150,000
各種委員会	280,000	209,842	運営委員会費 0 企画委員会費 70,000 研究委員会費 70,000 機関紙発行委員会費 69,842
研究調査費	200,000	71,920	研究調査費 71,920
名簿作成費	200,000	115,525	会員名簿印刷費 75,600 返信用切手 35,200 返信用封筒 4,725
理事選挙費	0	0	
事務経費	450,000	354,895	アルバイト代 312,900 振込手数料 3,050 会計監査交通費 9,000 事務用品代 18,920 第9回総会資料印刷代 11,025
予備費	984,053	50,000	セミナー講師謝金 50,000
残高		1,991,891	平成25年度へ繰越
	4,294,053	4,421,053	

平成25年9月2日

監査 中原 俊輔 印 田中 宏幸 印

平成25年度 事業計画

- 5月 学会誌第8号の発行
- 7月 会報24号の発行
- 7月/8月 理事選挙
- 9月 常任理事会
- 10月 会報25号発行
- 11月23日(土) 理事会・総会・研究大会 (第1日目)
- 11月24日(日) 研究大会 (第2日目)
- 1月 会報26号発行
- 3月 常任理事会

日本NIE学会 平成25年度 予算案 平成25年4月1日～平成26年3月31日

(収入の部)

項 目	予 算 (円)	備 考
平成24年度繰越金	1,991,891	
会員会費	1,500,000	
法人会費	900,000	
雑収入	10,000	
合計	4,401,891	

(支出の部)

項 目	予 算 (円)	備 考
会議費	800,000	
会報	90,000	第24号 第25号 第26号
学会誌	800,000	第8号
通信・連絡費	300,000	
第10回大会運営補助費	150,000	
各種委員会	280,000	
研究調査費	200,000	
理事選挙費	200,000	
国際交流経費	100,000	
事務経費	650,000	
予備費	831,891	
合計	4,401,891	

第11回 学会開催地

次回、第11回大会は次のような予定となりました。詳しくは次号でお知らせいたします。

2014年12月6日(土)、7日(日) 宮城県仙台市 東北福祉大学にて開催

役員改選

第5期の役員として、選挙による理事が総会で承認されました。以下のとおり会長、副会長等が選出、承認されました（一部、新会長に一任、会報にて報告部分を含みます。）。

日本NIE学会 第5期 役員（2014・2015年度）（敬称略）

会 長	小原 友行				
副 会 長	谷田部玲生				
理 事	〔選挙による選出〕（五十音順）				
	赤池 幹	朝倉 淳	阿部 昇	有馬 進一	植田 恭子
	白井 淑子	枝元 一三	小田 迪夫	岸尾 祐二	小原 友行
	阪根 健二	重松 克也	高木まさき	豊畷 啓司	野津 孝明
	橋本 祥夫	平石 隆敏	谷田部玲生	柳澤 伸司	渡辺 裕子
	〔会長推薦〕				
	長谷川恵一（日本新聞協会新聞教育文化部長）				
	城島 徹（日本新聞協会 NIE 専門部会長）				
	（以下五十音順）				
	鴛原 進	越地真一郎	木村 博一	高田喜久司	外池 智
	高辻 清敏	田口 絃子	土屋 武志	二田 貴弘	福田 徹
	藤川 由香	松岡 靖	松川 利広	三上 久代	森田 英嗣
常任理事	（五十音順）				
	朝倉 淳	植田 恭子	白井 淑子	枝元 一三	小原 友行
	阪根 健二	重松 克也	城島 徹	高木まさき	豊畷 啓司
	二田 貴弘	野津 孝明	橋本 祥夫	長谷川恵一	平石 隆敏
	森田 英嗣	谷田部玲生	柳澤 伸司		
監 事	稲井 達也		田中 宏幸		
委 員 長	企画委員長		阪根 健二	研究委員長	柳澤 伸司
	機関誌発行委員長		豊畷 啓司	運営委員長	重松 克也
名誉会員	影山清四郎				

会報ニュース

◇事務局移転のお知らせ

役員改選により本学会の事務局が移転します。現在の事務局における業務は2014年3月末日までとなります。これまでのご支援に感謝申し上げます。ゆうちょ銀行口座も3月末をもって閉鎖となりますので、ご承知おきください。

4月1日からの新事務局は下記のとおりです。引き続き、ご理解、ご協力のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

重松 克也（横浜国立大学教育人間科学部）
〒240-8501 横浜市保土ヶ谷区常盤台79-2 TEL&FAX: 045-339-3433 E-mail: ka-shige@ynu.ac.jp